

宅建設要綱（第一次建築）」が残されている。それは、①実行機構、②各係任務大略③資材入手出荷、④用材規格、⑤資材受渡、⑥県営仮設住宅建築町村協力員、⑦建設用地、⑧建設労力、⑨建設に関する事項、⑩建設状況報、⑪県営住宅罹災者収容基準から構成されるもので、細かく様々なことが定められている。中でも、⑩県営住宅罹災者収容基準は、当時の経済や社会状況がうかがえるので、次に示す。

- 一、一人以上三人以下ハ六畳ニ同居
- 一、同居家族二人以上六人マデ六畳
- 一、同居家族七人以上九畳（六畳・三畳）

1人1畳の基準で、押入・炊事場が付属する。たとえ、仮設住宅とは言え、被災者にとっては非常に不自由な生活を余儀なくされたのである。

5. おわりに

本原稿は、「当時の災害の状況、復旧・復興について」という依頼であったが、果たして応えられたどうか自信はない。決められた紙幅をうまく割り振って、地震や津波被害の悲惨さを語る資料もっと紹介すれば良かったのか、あるいは復興に関する義捐金なども触れる必要があったのか、思うことも多い。

ただ、当時の資料を詳しく見て気付いたことがある。たとえば、被害統計と言えば、これまで飯田波先生が蓄積された調査データをまとめられた「昭和19年2月7日東南海地震の震害と震度分布」がよく利用されており、『隠された大地震・津波』^[12]にも引用されている。実は『三重県史』の解説にもそのデータから県全体の死者数406名と記された。ところが、今回当時の被害統計資料などに当たってみると、若干疑問のある箇所^[13]も出てきた。更に地域の資料収集をし、典拠となる資料を確認する必要性を痛感した。

また、度会郡の吉津村・島津村（現南島町）など、多くの被害が出ているにもかかわらず、資料収集も行っていない。もう一度、原点に立って関係資料の発掘に臨みたいと意を強くした。

なお、当時の震災に対する緊急措置や復興体制は、行き届いた統制・管理ができていたように資料から感じられる。戦時中だったからというのではなく、今後の防災対策として参考とすべき面が多々あるような気がする。

参考文献

- [1]『三重県史』資料編（近代4）：1991.
- [2] 齋坂清信・黒沼新一（1945）：「昭和十九年十二月東南海地震の三重・和歌山両県下実地踏査報告」『秘秘昭和十九年十二月七日東南海大地震調査概報』中央気象台.
- [3] 表俊一郎（1945）：「昭和19年12月7日東南海地震ニヨル地震津波」『東京帝国大学地震研究所研究速報』第4号.
- [4] 表俊一郎（1946）：「昭和19年12月7日東南海地震に伴った津波」『東京帝国大学地震研究所叢報』第24号第1~4冊、岩波書店、1948.
- [5] 飯田波事（1985）：「昭和19年12月7日東南海地震の震害と震度分布」『飯田波事教授論文集、東海地方地震・津波災害誌』.
- [6] 関係資料として『昭和十九年拾二月震災諸記録編』、『震災復興委員会議録』、『被害家屋調査表』、『震災復興概算書編』などがあり、尾鷲市の故伊藤良氏の協力により複写.
- [7] 津市教育委員会所蔵、関係資料は表紙のない綴.
- [8] 『昭和十九年十二月起地震・海嘯災害関係書類』尾鷲市の故伊藤良氏の協力により複写.
- [9] 参考文献[9]では、衣料の被害額を減額し、総額8,040,400円に訂正している.
- [10] 『昭和と大海嘯記録』錦町1945：（『紀勢町史記録編』2001に収録）。なお、この『記録』は当時の吉田町長が序文や巻末の「法要記録」を記述しており、町長が編者と言われることがあるが、文中の「撰筆スルニ当ツテ」は収入役の西村千代太郎が記し、西村が全体の編集を担当した.
- [11] 『伊勢新聞（紀南版）』1944年12月12日付け.
- [12] 『昭和と大海嘯記録』の原文では「壹百四拾七戸」となっているが、計算や他の資料から447戸に修正した.
- [13] 山下文男（1986）：『戦時報道管制下隠された大地震・津波』新日本出版社.
- [14] たとえば、参考文献[4]では尾鷲町の死者数96名とし、市町村別死者数で県内最高であるが、当時の被害統計では行方不明者を含めて46名（北牟婁地方事務所のデータでは38名）、1966年の三重県南部地区防災気象連絡会・尾鷲測候所編の『災異誌』や1971年の『尾鷲市史』下巻でも38名である。96名の典拠は明確でないが、あまりにも異なっている.
- さらに、志摩郡の園府村の死者数32名も、当時の資料では鳥羽警察管内で2名の死者しかあがっていない。また、参考文献[4]の本文にも「志摩郡全体で死者2人」と記しており、単純なミスとも思える。こうしたことから、県全体の死者数406名は若干変更する必要がある。なお、尾鷲町のデータに関して、尾鷲市中央公民館郷土資料室田崎通雅氏の協力を得た。記して謝意を表したい。



1944年東南海地震と1945年三河地震
— 60周年 —

埋もれている被災風景 を掘りおこす

—被災写真から得られた碧南市・
原田三郎さんの被災体験—

木村玲 欧

林能成

Collecting Ethnographic Descriptions of Unknown Stories from the Victims' Past Experiences - A Case Study of Interviewing the Victim Experienced the both 1944 Tonankai Earthquake and 1945 Mikawa Earthquake -

Reo Kimura・Yoshinari Hayashi

きむられお
はやしよしなり：名古屋大学災害対策室

戦時中に発生した東南海地震・三河地震は、公にされている被災写真・被災体験が少なく、特に被災者の生活への影響に焦点をあてた被災風景は明らかになっていない。本論では、被災写真を秘蔵していた被災者から被災体験を収集することによって、「埋もれている」被災風景を「掘りおこす」試みを行った。

1. なぜ「埋もれて」いるのか

タイトルに「埋もれている」掘りおこす」という言葉を使った。これにはわけがある。1944年（昭和19年）12月7日に発生した東南海地震、1945年（昭和20年）1月13日に発生した三河地震を調査していると、他の地震に比べて被災風景が「埋もれている」のである。被災風景を知るためには、建物の被害写真などの物理的被害に関する資料と、日常生活がどのような被害を受けてどのように生活再建を成し遂げたのかという被災体験などの心理的社会的被害に関する資料の2つが必要だが、そのどちらもが乏しく、印象からするとこの2つの地震よりも前に発生した1891年（明治24年）の濃尾地震や1923年（大正12年）の関東大震災よりも少ないのである。

これには以下の3つの理由が考えられる。まず、国防保安法・軍機保護法・軍用資源秘密保護法・治安維持法などによる報道管制下で起きた地震のため、被害に関する報道記録・調査記録がほとんど残されていないことである。アジア・太平洋戦争で日本の敗戦が濃厚になるにつれて、これらの法律が軍部によって恣意的に拡大解釈され、国民の人権や報道の自由は無制限に制約されていった。そのため、3500余名の命が失われ、東海地域の軍需工場が壊滅的な被害をうけた2つの地震に関する報道管制・調査への制限は厳しく、被害規模に比べると公的な資料はほとんど残されていない。2つめの理由として、アジア・太平洋戦争という長期にわたる非日常時における地震であり、被災者に与えた地震の衝撃が相対的に大きくなかったため、地震に特化した明確な記憶・記録があまり残っていないことがあげられる。東南海

地震・三河地震の被災者へインタビューを行っている。地震に特化して思い出せなかったり、「大変だった戦争」の話に移行したりと、地震の衝撃よりも長期にわたる戦争の衝撃の方が大きかったことがうかがえる。そのために被災体験が埋もれてしまっていることが考えられる。最後に、阪神・淡路大震災が発生するまで、「外力や物理的被害の解明」に災害・防災研究の焦点が当てられていたことが理由としてあげられる。未曾有の都市巨大災害である阪神・淡路大震災が発生するまで、災害・防災に関する研究は、外力である自然現象の発生メカニズムや構造物などの物理被害についての理学・工学的解明が中心になされてきた。そのため、心理的社会的被害、日常生活への被害、生活再建についての研究がほとんど行われず、これらに関する資料をほとんど存在していない。

2. なぜ「掘りおこす」のか

それではなぜこのような「埋もれている」被災風景を「掘りおこす」のか。それは過去に起こった被害と人々の生活再建過程を明らかにすることで、被害が発生するしくみ、被害への対処策、被害からの生活再建と適切な支援のあり方を知ることができ、来たるべき将来の災害に対する現在の社会の防災力を上げる（社会の脆弱性（vulnerability）を下げる）ことができるからである。例えば、林（1999）は、宇佐美（1996）の『日本被害地震総覧』に代表されるような、活断層・考古学的遺跡・文書資料・各種史料などから被害地震の発生時期・地震規模・断層位置等を明らかにしてきた研究を「史料地震学」と定義し、「一般市民に『この断層系は今後しばらく大丈夫』という中長期的な地震予知における安心情報を提供し、一般市民が状況を正確に認識して自分の判断で適切な行動がとれるような情報を提供するという社会・防災への大きな貢献を行っている」ことを指摘している。また、北原（1999）は、歴史的資料に基づいた災害研究を行うことの意味として「過去の災害について、災害からのさまざまな被害を克服して社会的復興を獲得してきた歴史過程を再現するこ



図1 原田三郎さん。

とで、現在のわたしたちの社会がそこから受け継ぐべき課題がなにかを引き出す」と意味づけている。

21世紀には複数の大規模地震の発生が予想されており、1995年の阪神・淡路大震災以降、西日本は地震の活動期に入ったことが防災白書にも明記されている（防災白書、2001）。地震の活動期に入ったわが国においては、今後も第二第三の都市巨大災害が起こることが予想される。筆者はこれまで阪神・淡路大震災の被災者を対象にした社会調査から、被災者の生活再建過程を明らかにしてきた（例えば、木村・林他、1999；2001）。しかし、来たるべき災害に対して「社会の防災力を上げる」ためには、なるべく多くの地震災害を事例として被災風景を描きだし、比較対照することが必要である。

3. 碧南市・原田三郎さんが撮った被災写真と被災体験

本論では、東南海地震・三河地震における「被災写真から得られた原田三郎さんの被災体験」を一事例として示すことで被災風景を描いた。これらの地震では、前節で述べたような時代背景やカメラが高価だったこともあり、被災風景を写した写真がほとんど残っていない。しかし原田さんは若いころからカメラが趣味で、被災時所属する軍隊の上官に報告するために被災写真を撮影していた。終戦後、軍の命令でそのほとんどを燃やし



図2 インタビュー風景。



図3 インタビュー風景（左が林）。



図4 インタビュー風景（右が木村）。



図5 原田さんが撮影した写真の数々。

てしまったものの、幾枚かを実家に送っていたらしく、後々になって実家から発見されたという貴重な写真である。インタビュー当日は、当時の被害写真の木製パネルを部屋一面に広げながら、写真の説明と直下型地震である三河地震の被災体験についてインタビューを行った。（図1、原田三郎さん、図2～4、インタビュー風景）。

調査日時は2003年10月9日（木）13:00～16:30。調査対象者は碧南市西原商店街振興組合の理事長をしている原田三郎さん（インタビュー当時85歳）。調査場所は碧南市の原田さん自宅、聞き手は木村・林が行った。

4. インタビューの概略

原田さんは85歳。湖西町西端地区で戦後から

スーパーマーケットを経営していた。今は隠居して、「西端商店街振興組合」の理事長をしている。原田さん宅は、戦前には8反の田んぼを有し、小作をかかえる地主であり、また家業として製粉業を営んでいた。

当時、原田さんは近衛兵として東京にいたが、昭和19年12月、父親の手紙によって故郷が東南海地震で被害を受けたこと知り、翌年1月5日から10日間の特別休暇をもらって、里帰りしていた。三河地震は、まさにその帰省中の1月13日未明に起こったものである。震災発生時、自宅には7人の家族がいたが、幸い死傷者はなかった。原田さんは、服や靴を身のまわりに置いておく軍隊で身についた習慣のため、すぐに身支度を整えられた。屋外に出たあと、真っ暗でわからず道具も



写真1 東南海地震の復興作業中の店舗(翌朝三河地震).



写真2 三河地震後の自宅店舗.



写真3 東南海地震後の康順寺本堂(写真左端と中央の灯籠のみが倒れている).



写真4 三河地震後の康順寺本堂(写真中央と右端が写真3と同じ灯籠).

ない中、生き埋めになった隣家のおばあさんを救出した。実家は倒壊し、1ヶ月間の露天生活を余儀なくされた。また経営していた工場も最終的には解体し、対象者の曾祖父の代から続いた家業を途絶えさせることになった。

インタビューは、原田さんの自宅で行われた。現在も営業中のスーパーマーケットに隣接する昭和30年ごろに建て直した木造家屋である。インタビューは、原田さんの仕事場兼応接間とみられる10畳ほどの和室で行った。原田さんは若いころからカメラが趣味であり、当時の被害写真の木製パネルを部屋一面に広げながらのインタビューであった。なおインタビューは、3時間にわたるものになったため、実際の発言と以下の文章表記とは必ずしも一致していない。

5. 写真撮影のいきさつ (1) 東南海地震の復興作業を終えた朝、三河地震が起こった。

Q) いつ、これらの写真を撮られたのですか。
昭和20年1月14日の朝に撮ったものですわ。13日の朝に地震があって、その翌日の。
Q) 当時から、この碧南市内に住んでいたのですか。

当時私は、東京で近衛兵をやったわけだがね、昭和19年12月に「東南海地震で家が大破した」と親父から手紙がきて、それで大本営にいる私の先輩が「原田君、お前は三河だったよな。大地震があったんだぞ」「親父から手紙が来たんで知っております」「これは極秘だけど教えてやる。『100mの津波』が起こったんだ」そう言うわけですよ。「渥美半島が飲まれてしまった。知多半島も8分なめてしまった」ちょっと考えられないわけですよ。それで「お前どこだ」というんで、「安城の駅から3里ほど南へ下がった海岸線のあたりです」といったら、「じゃあもうだめだ」とこういうわけですよ(笑)。当時は流言蜚語が激しくてね。

Q) 父親からの知らせを受けて、すぐさま故郷に帰った…。

いや、軍隊では3親等内に事故がなければ普通は返してくれない。親が死んだとか、きょうだい死んだとか、私の場合はそれがなかったが、地震があったもんだで、特別に返してくれた。ただし「泊で行ってこい」とこういうわけですよ。でもそれでは、当時は行って帰ってくるだけなんです。それでもう1度頼んだら10日くれた。

ところが年末だったもんで、仕事が忙しくて、翌月の昭和20年1月5日、この日は昔は旗日だったもので、それから帰って来たわけです。帰ってきたところ、復興作業で人手がない。ただ人手を集めるためには、当時は区長の許可を得ないといけないんだけど、区長が先生あがりの知っている人で、事情を話したら優先的にやってくれて、しかも作業隊長が親父の同級生で、急いで復興作業をやってくれて、「明日の朝完成しますよ」とこういってくれた。それで高粱(たかばり)とかいろいろなものをはずして、みんな落ち着いて「明日の朝完成」(写真1)というその夜中に、直下型が来たわけですね。それで次の日の地震がこれ(写真2)。

6. 写真撮影のいきさつ (2) 軍隊の上官に報告する写真、実家に送ったもののみが現存。

Q) 被害のようすを写真に撮ろうと思ったのはどうしてですか。

それでまあ、あの、私としては、復興作業をして帰ってから報告するときに、口頭でなんだかんだいうよりも、証拠となるような写真があった方がいいと思って、カメラを持ってきたわけです。ところが、来てみたら、最初の東南海の地震の被害というのは、多少の被害はあったけど、この康順寺(こうじゅんじ)(写真3、康順寺本堂)をみてもわかるように灯籠が転んだだけ。これはたぶん、他に撮るところがなかったから、これくらい

しか撮らなかつたんだろうけど、ところが居るうちに、激震が来たってことで、残りのフィルムでこれらを撮ったというわけですわ(写真4、地震後の康順寺本堂)。

Q) どのようにして写真を保存していたのですか
もっとたくさん持っていたんだけど、戦争が終わるときに「手持ちのものは全部燃やせ」という軍の命令があったもんだで、私は責任があったもんだから、模範をしめさにかいもん、全部燃したんですわ。それで、原版とかその他いろいろなものではなくて、それはおそらく、その時に燃したと思うんですよ。

ここにあるのは東京に帰ったときに、撮ったもののうちのいくつかを家に送ったものが残ってたもんで、それをしまっておいたんですわ(図5、原田さんが撮影した写真の数々)。

7. 三河地震の被災体験 (1) 深夜3時30分ごろ、ガーッという激しいゆれで、私は飛び起きた。軍隊にいたので、服は布団の上、靴も土間にあり身支度できた。

Q) 三河地震当日のことについて教えてください。
三河地震のときには、深夜3時30分ごろだったかね。たぶんみんなほとんどが床からはなれずにいたと思う。真暗闇の中のことで、よくわからなかったし、「助けてくれ」という声が聞こえてきても、当時は戦争中ということもあって道具と

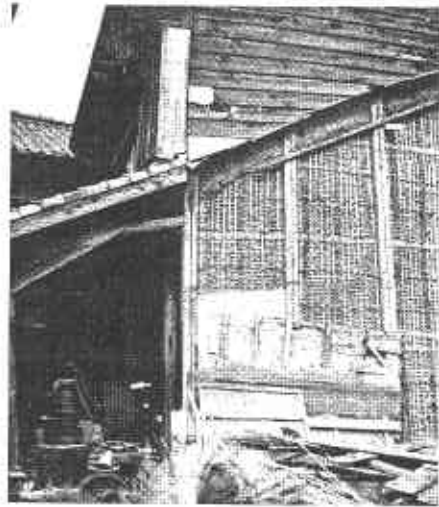


写真5 自宅(二階本宅, 下製めん工場)

いうものがなかったために無理だった。

直下型がガーッときて、飛び起きたんだけど、だいたい家から外へ抜け出すことができなかった。空襲警報下だったので、雨戸を閉めて、ガラス障子をしめて、カーテンをしめて、直下型なので、東西に建てたガラス障子はほぼ全滅したけど、南北に建てたガラス障子は斜めにはなっているけど壊れなかった。

私は兵隊をやっていて暗闇には慣れているものだから、あまり怖くはなかった。だけれども寝込みを襲われたもんで、壁ははずれて、家はかたむいて、電気は真っ暗だし、裸じゃ出られんで、それで壊れてない南北のガラス戸をけやぶって外に出ようと思った。しかも兵隊なもんだから、靴は土間の隅に、軍刀は戸ひらにつかえ棒のように立て掛けていた。服は自分の寝た布団の上に置いておいた。それで、布団の上の服を着て、靴は倒れた壁の下から見つけて、刀はちょうど倒れた杉板の戸に挟まってしまって抜けないが、なんとか杉戸を踏み抜いてとったんだらうね。刀は曲がってなかった。



写真6 自宅鶏舎付近

8. 三河地震の被災体験(2) 生き埋めの隣のおばあさんを、必死に瓦をはがして救助した。

Q) 震災当日、家から出たあとはどうしたのですか。
隣の家では2階がくずれて階下にいた人が1人、梁の直撃を受けて即死して、他は幸いにも助かったんだけど、声が出なくて助けようと思ったんだけど、瓦はめくれるけど、梁がどうにもならない。それでも何とかして隣のおばあさんは助けてうちにつれてきたんだけど。

それから、私は近衛の兵隊なもんで、小学校の両陛下の御真影を守らにゃいかんということで、親父も明治時代に近衛警だったもんで、倒れている家を踏み越えて学校へ走って抜け出していったわけだ。それで両陛下の(御真影が)入っている桶箱、どうやってこんな重いものを持ってきたのかはわからんが、何度かコケながら持ってきたんだね。それで区長に断って、うちの蔵に収めようとしたんだね。ただ、蔵の扉が地震で開かなくて、それで防空壕のところにしまっておいて親父と見張りをした。

Q) ご家族の方は無事だったのですか。
この時、家には7人寝とったんだがね。私と、両親。一番上の兄夫婦、すぐ上の兄、妹。2階で寝とった兄夫婦は渡り廊下の棟をまたいで出てきた。すぐ上の兄は母屋のひさしへ出て、牧の木から下のどぶへ下りた。それで妹を下ろした。母親

は早くに店の方へ出られたんだけど、店内へ出た直後に電気がきれたが、たまたま工事の大八車が店内に引き込んであって、そのスペースがあったおかげで店内から外へでることができた(写真5, 自宅(二階, 本宅; 下, 製めん工場), 写真6, 自宅鶏舎付近)。

ただ夜中のことのもんで、真っ暗でわからなくてね、うちのとなりが寺なもんで、やられてしまってもものすごい音やらはこりやらでねえ、「わーっ」となってしまったのです。

9. 三河地震の被災体験(3) 海溝型地震では灯笼だけが倒れた寺も、直下型地震では全壊

Q) やられてしまった「となりの寺」とは…。
さっき話した康順寺のことで「東南海では灯笼だけが倒れた寺」のことで、これが昔の本殿なのですが(写真3)、これが山門。山門は東南海の昭和19年の12月7日お昼頃、これで倒れたらしいですね。私はそのころは、まだ、東京で現役で向こうにおりましたが、

とにかく康順寺はこういう風に立派にたっとなったわけです。それが大地震で、押しつぶれて、粉々に壊れてしまったわけです。直下型でねえ「バーン」ときて、それで倒れてしまったわけです(写真4, 写真7(康順寺の門))。

10. 三河地震の被災体験(4) 450名の西端集落、26名が亡くなった。

Q) この集落での被害はどうだったのですか。
この集落では26人が亡くなりました。ここは昔は碧海郡明治村大字西端(にしばた)という地名でした。碧海郡16ヶ町村の1つの碧海郡明治村です。明治村は5ヶ部落あってですね、そのうちの大字西端。今は西端という名前が残っているのは信号のところの表示しか残っていないんだけど、ここにはもともと海でね、油ヶ淵といってたくさん田んぼがあったんだけど、その西だから西端といったんだけど、今はいくつにも地名がわかれてしまって、もとの地名がなくなっちゃったのです。部落全員は450名、7割が農家、



写真7 康順寺の門

商売はこの商店街があったわけです。26人が亡くなり、大きな被害でした。一番多く亡くなったのは、向こうの先生のところで、先生のところはたしか3人亡くされたのかな。

11. 三河地震の被災体験(5) 震災当日は無我夢中、まったく記憶がない。

Q) 夜が明けてからは、どうなされたのですか。
震災当日は、合間を見つけては、うちの中のものを出したりしたんだと思う。私は写真をとりにいったんだと思うが、無我夢中だったと思う。まったく覚えていない。翌日の夜には出てしまったので、そこからはよく覚えていない。

それである日の14日の夜には、私は東京に帰ったわけだが、とにかく休みが10日間ととにかく時間内に行かんといかんので、夜行で行って、記憶にあるのは、途中で沼津の駅を通過したんだが、沼津の駅が爆撃されていて、そんなことは覚えてるんだけど、あとはあまり覚えてない。

12. 三河地震の被災体験(6) カメラを持つだけで捕まる時代、お寺と学校など公共物のみを撮影

Q) 地震があってから2日間のうちに写真を撮られたわけですね。

そう。ただ、ぶらぶらカメラをぶら下げているだけで捕まってしまう時代なので、お寺と学校という公共物と自分の家なら撮ってもいいだろうと



写真8 今にも倒れる原田精米製粉製めん工場。

思ったんだろうね。

当時はカメラを持っていると、いいことは言われない。持っている人も、まずいなかった。カメラを持っているだけで「スパイだ」といわれて捕まってしまう。だけれども私は、昔からカメラが好きで、刈谷のあたりに一二三堂（ひふみどう）というカメラ屋があって、そこに置いてあったカメラがどうしても欲しくて、親父にねだって「オリンピックC」というカメラを、たしか1円で買ってもらって、それが始まりだね。昭和8年から9年のことだけれども。

13. 三河地震の影響 (1) 家は全壊で自炊ができず、1月の寒空の下、1ヶ月近く露天生活が続いた。

Q) ご実家は三河地震によってどんな影響を受けたのですか。

もうどうしようもない。3階建ての製粉工場もつぶれてしまった。三河地震が起きるまでは、親父も「大丈夫」と言っていたのに、見事につぶれてしまった。こんな風に「勾張（こうはり）」と



写真9 警報下余震は続く、1月の寒さの中の朝食支度。



写真10 1ヶ月余の露天生活。

いうつかえ棒で支えたんだけど、結局、全部壊してしまった。あとで聞いた話したが、これ、自動車を通るときに邪魔になるので、ずいぶん「取れ」といわれたらしい（写真8、今にも倒れる原田精米製粉製めん工場（自宅））。

自炊もできなくて、うちの中には入れないし、露天生活が1ヶ月近く続いたわけです。1月で寒いのに、上からは空襲、下は余震ということで（写真9、警報下余震は続く、1月の寒さの中の朝食支度）、写真10（1ヶ月余の露天生活））。

14. 三河地震の影響 (2) 1945年1月13日、名古屋では空襲、三河では大地震に見舞われた。

Q) 空襲はかなり激しかったのですか。ちょうど、この地震のあった13日の夜にね。名

古屋の大曾根の三菱電機。あれが爆撃を受けたんだ。そこにはうちの一番兄があそこに行っとったんですけど、たまたま晩にうちに帰ってきていて、母親と寝ながら「今晚、このあたりに大地震が起るって名古屋の人が言っとるよ」「そんな馬鹿な」って話していたら、ちょうどそのとおり（笑）。兄は、ここでも命を拾ったわけだが、向こうでも命を拾ったわけでもよかったという。

その朝、爆撃帰りの飛行機が、安城あたりをとんでいるのを、屋根から写真にとったんだけど、どういうわけか写真は見とれている親父の後ろすがたしか撮れなかったんだね。

15. 三河地震の影響 (3) 地震で廃業、8反あった田んぼも戦後はなくなってしまった。

Q) 地震によって家業はどうなされたのですか。それで工場が壊れたもんだで、昔からやっていた精米・製粉・製めん業ができなくなってしまった。機械は農協にうばらってしまった。その関係もあって、親父は明治村の5ヶ部落の農協で勤めるようになったもんで。

私は終戦まで東京にいたんだけど、昭和21年3月25日、マッカーサーが来たときに、皇居にいて、お言葉を賜って、それで解散して帰ってきたわけだね。私が帰ってきたときも、商売は農協がやっていたもんで、転業しようと思った。床屋か自転車屋がいいなと思ったが、自転車屋は近くにあるし床屋は技術がいる。それで小売の商売をするようになった。商売をはじめたまではずいぶん時間がかかった。電気屋にもいじめられた。ただ、商売をはじめたから30年間年中無休でやり、そのおかげもあって、現在があるわけですわ（注：現在もインタビューをした自宅の隣に「(有)フードはらだ」というスーパーがある）。

あと田んぼは8反あったんだけど、家が商売をやっていたから、全部小作に任せていたんだけど、終戦によって「耕そう」と思ったら、明治村では田んぼを返してくれなかったんですわ。預貯金は封鎖。土地があっても自作できん。あと帰ってくると終戦後だから、警察は機能してなくて、60



写真11 松光山應仁寺本堂。



写真12 應仁寺本堂と山門(右上西端小学校)。

名の消防団がおったわけだね。それですべてをやっていた。でもなかなか60名全員集まらないわけだし。なかなか大変だった。そんな時代でした。

16. 三河地震の影響 (4) 地震で地盤は沈降、油ヶ淵周辺の田んぼは地上げをした。

Q) 西端周辺の被害はどうだったのですか。あの直下型では、このあたりの地盤は下がってしまったんだね。この油ヶ淵の田んぼのところは、田んぼを地上げしました。また地割れもありました。子どものころに「藪に入れ」といわれたが、たしかにそうかもしれない。しかし、この辺の藪は、伊勢湾台風で塩雨が降ったために、ほとんど枯れてしまった。このお寺（應仁寺）のところも藪があったけれども、みんな枯れてしまっ

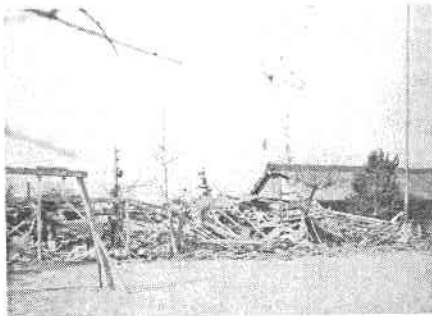


写真 13 西端小学校西校舎



写真 14 如光堂(應仁寺隣り)

た(写真 11, 松光山應仁寺本堂; 写真 12, 應仁寺本堂と山門(右上 西端小学校); 写真 13, 西端小学校西校舎; 写真 14, 如光堂(應仁寺隣り))。

17. 三河地震の影響 (5) どんな地震でも、まずあわてないことが大切

Q) 最後に、地震に備えている人たちに対して、アドバイスのようなものをいただけますか。

たぶん同様の地震が起こったとしてもこれだけの被害が起こることは全くないと思います。今の家は基礎工事が全然違う。腰もしっかりして、ポルトでとめて、やれ筋かいだて、それで上が重い瓦でしっかり押えているし。たぶん怖いのは「火」だけだと思う。

アドバイスというのかよくわからないが、「どうい

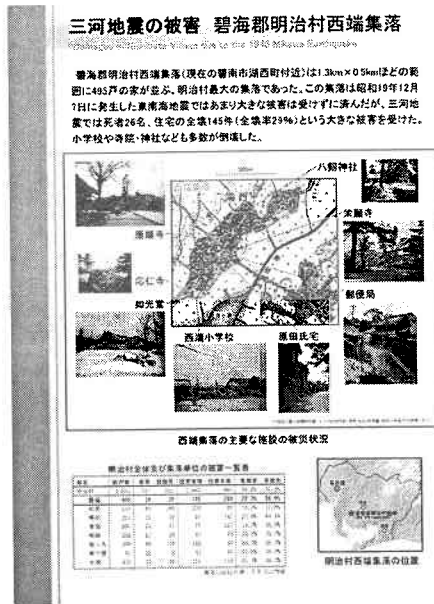


図 6 三河地震の被害。碧海郡明治村西端集落。

う地震でも、あわてる必要はない」と思う。とにかく動けるような地震ならあわてていいことはない。逃げられるわけだし、各自に気をつければいい。外へ行ったほうがいいのかどうかも状況によって違うわけだ。また、私の体験した直下型地震は、ガーッといきなりきたから、まずあわてちゃうし、どうにもならなくて、でもそうなら、逆にあわてることもない。常に冷静に自分がやるべきことを行う。そういうことだと思います。

Q) ありがとうございます。

18. 被災風景を視覚化して地域住民に伝える試み

以上のように、碧南市・原田さんの被災風景を事例として、東南海地震・三河地震の被災風景を収集した。収集した被災風景を地域住民に伝えるために、筆者らは資料をもとに A1 サイズ大のバ

撮影者・原田三郎さんにとっての三河地震

Interview with Mr. HARA, a victim of the 1945 Mikawa Earthquake
深夜3時30分ごろ、ガーッとという激しいゆれで、私は飛び起きた。
軍隊にいたもんで、服は布団の上に置き、靴も土間にあげてあったので、すぐ身支度できた。



生き埋めになった隣のおばあさん。私は必死になって瓦をはがした。
「助けてくれ」という声が聞こえてきても、真っ暗でよくわからない。道具がない。

震災当日、無我夢中だった。私は写真を撮った覚えがない。
家の東西のガラス障子はほぼ全滅。しかし南北のガラス障子は傾いたが壊れなかった。

しかし家は全壊。自炊ができず、1月の寒空の下、1ヶ月近く露天生活が続いた。

インタビュー：三河 原田三郎 (2003年10月8日)

図 7 撮影者・原田三郎さんにとっての三河地震。

ネルを作成した(例えば図 6, 図 7 など)。作成したパネルは、東海地域における防災意識の啓発活動拠点の1つで、地域住民・研究者のための災害アーカイブ・交流ホールを備えている「名古屋大学災害対策室地域防災交流ホール・展示コーナー」に常設展示を行っている。また、地域住民の希望によって、地域での勉強会などのためのパネル貸し出しも行っている(図 8, 図 9)。

本論では、一事例をもとに東南海地震・三河地震の被災風景を描きだしていった。被災者へのインタビューは、原田さんへのインタビュー以降も随時行っていて、さまざまな被災体験を収集している。今後は、収集された被災風景をもとに、より多くの「東南海地震・三河地震の被災風景」を描きだし、過去に起こった被害と人々の生活再建過程を明らかにすることで、来たるべき災害に対する現在の課題を明らかにし、「社会の防災力向上」に寄与していきたい。

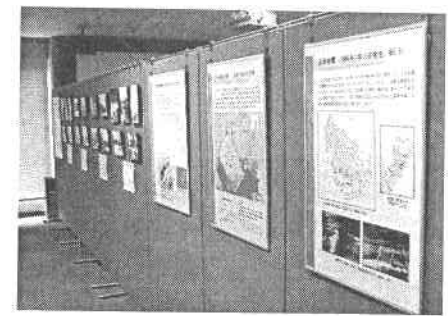


図 8 作成したパネルと被害写真。

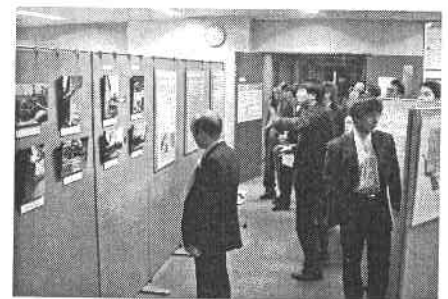


図 9 名古屋大学災害対策室での展示。

参考文献

- [1] 林春男(1999): 史料地震学をどう防災に活かすか、地学雑誌, 108 (4), pp. 458-464.
- [2] 木村玲欧・林春男・立木茂雄・浦田康幸(1999): 阪神・淡路大震災後の被災者の移動とすまいの決定に関する研究, 地域安全学会論文集, No. 1, pp. 93-102.
- [3] 木村玲欧・林春男・立木茂雄・田村圭子(2001): 阪神・淡路大震災後のすまい再建パターンの再現 - 2001年京大防災研復興調査報告 -, 地域安全学会論文集, No. 3, pp. 23-32.
- [4] 北原系子(1999): いま、なぜ災害社会史か?, 自然災害科学, 18 (1), pp. 9-14.
- [5] 内閣府(編)(2001): 平成13年版防災白書, 財務省印刷局.
- [6] 宇佐美龍夫(1996): 新編日本被害地震総覧, 東京大学出版会.